目次

うのゐ奥山今日こそは……日生
我等如何に進むべきか……川修
國民精神の涵養……本多日生
國防上の急務……細野辰雄
常樂庵隨筆……古田昂生
法華經要文講義……本多日生
記事報導……

第廿八年二月號

本多日生猊下著書一覽

○法華經の心髓　金壹圓六拾錢
○日蓮主義初步　金七拾錢
○日蓮主義　金壹圓五拾錢
○修養と日蓮主義　金壹圓五拾錢（品切れ）
○國民道德と日蓮主義　金壹圓五拾錢
○日蓮聖人正傳　金貳圓貳拾錢
○日蓮主義綱要　金貳圓貳拾錢（品切れ）
○日蓮聖人の感激　金貳圓貳拾錢（品切れ）
○日蓮主義の運用　金貳圓五拾錢
○東洋文明の權威　金貳圓貳拾錢
○國民教化　金貳圓貳拾錢
○法幢　金貳圓貳拾錢
○戰士の伴侶　金貳圓貳拾錢
○思想問題の歸結と法華經　金貳圓
○聖訓要義　各卷壹部金貳圓貳拾錢
○開目抄詳解　上卷一部金貳圓八拾錢
○聖語錄　金貳圓八拾錢
○優婆塞戒經通解　金八拾五錢
○大乘本生心地觀經通解　金八拾五錢
以上各送料一部金八錢
○法華經講義　上卷下卷各一部金參圓四十錢　送料一部金十八錢
○大藏經要義　一部金參圓八十錢十一卷迄既刊　送料一部金拾八錢牛年前金送料不要　單製金參拾錢　上製金五拾錢送料一部金貳錢
○法華經要文　金壹圓參拾錢郵稅六錢
○佛教信仰の正統
以上講讀希望の方は左記へ申込まるべし
東京市外品川町妙國寺內
大藏經要義刊行會
振替東京三一五九六番

統一定價

一冊	金貳拾錢　送料五圓
半ケ年	金壹圓貳拾錢　送料共
一ケ年	金貳圓貳拾錢　送料共

廣告料

一頁	金拾圓
半頁	金六圓
四分ノ一頁	金參圓半

詳しき事の

大正十二年拾二月二十七日印刷納本
大正十三年一月一日發行（第三百四十六號）

編輯兼發行人　國友日斌
東京府荏原郡品川町南品川四百十二番地
印刷人　鈴木日雄
名古屋市東區千種町字五反田廿五番地
印刷所　三登社
東京府荏原郡品川町南品川四百十二番地
發行所　統一發行所
振替東京五一〇七一番
編輯所　統一編輯局
名古屋市東區臨田代町字城山七十七番地
電長名古屋東五四八七番

不許複製

統一

有爲の奥山今日越えて

本多日生

今日は「有爲の奥山今日越えて」といふ「いろは」歌の中の事を主にしてお話して見たいと思ひます。この「いろは」歌は頗る整うた人生觀を敎へて居ると思ふ、現代の思想の動搖も根柢は人生觀の不徹底から來るのであつて簡單に言へば「いろは」歌を能く心得て居れば大體間違ひはない位な事ではなからうかと思ふ。今日のえらい先生達は「そんな事では迚もいかぬ、いろは歌だけ知つて居るやうな事でどうして人生に處せるか」と言ふでせうけれども、吾輩から言へばさういふ大先生達は「いろは」歌がわかつて居ないのだらうと思ふ、東洋の文化はそこに尊いところがあるのである、古今に通じて易らないところの大眞理を抑へて居る。西洋の主張は洵に片々たる上すべりの事を唱へて居るやうに思はれる、それ故に思想が變化常なき有樣にあらはれて、倫理でも進化すといふ半面だけしか知らない。倫理の根柢に於ける體道の不變、即ち古今に通じて謬らず、中外に施して悖らずといふ倫理の大

本を知らない、時と處と位置とに依つて變化する側だけを以て倫理の全部と思つて居る。半分知つて居るといふ事は大分いゝやうに聞えるけれども、半分知つて間に合はない事が澤山ある。「一を知つて二を知らず」といふ事は半分知つて居る譯であるけれども、併し其の半分で間に合ふかといふとさつぱり間に合はぬ。「一を知つて二を知らず」といふのは大馬鹿三太郎といふ事で、半分賢いといふことではないのである。それで倫理は進化すといふやうな半面だけ知つて居るのは大馬鹿三太郎ナンである、何もわからぬ者も同然である。この大本よりして明かにしてかゝらなかつたならば、眞實を了解することは出來ない。一切の物は二面性である、人間の心にしても變らない心の本質と、それから時に依つて變化常なきところの心象との二面であつて、その動いて行く方だけが心であつて、變らないところの不變の心といふものは知らぬといふことになるから、そこで刹那生活といふやうな事が起つて來る。刹那々々に動いて行く事だけが人間の心だ、それ故に昨日泥棒したところが今日捕まへるといふことは間違つて居る、今日は改心して居るのぢや、捕まへるならば泥棒し居るところを捕まへなければならぬ、今日はモウ惡い事をしたと思つて後悔して善人になつて居る善人を罰するといふことはない、斯ういふやうな事を如何にも尤ものやうな風に言うて居る。昨日と今日の心の聯絡責任といふものが無い、昨日やつたのは昨日の太郎兵衛がやつた、今日の太郎兵衛は改心して居る太郎兵衛ぢやといふやうにして、たゞ精神の刹那に變化して行く側のみを以て見るから、そこで之を刹那生活と言ふ、生涯夫婦にならうナンといふ事を、この變つて行く心にそんな約束をするのは間違つて居る、氣の合ふ間だけ夫婦で、どつちからでも嫌氣がさしたら直ぐ別れてしまふのが眞理であるといふやうな事で、所謂共同生活などゝ稱して夫婦の制度を罵り、眞面目にそれを眞理だと思つて居る。この夫婦の關係を破壞して共同生活を眞理と思ふ思想も、社會の傳統的の良風美俗をぶち壞してたゞ新しがつて新社會を建設せんとするのも、皆同じ思想の流れである。これは皆な物事の變化の側だけを見て不變の側を忘れたから起るので、現代に云ふ舊いの新しいのといふ言葉は、即ち「一を知つて二を知らず」「大馬鹿三太郎」から出て來るのである。

そこで東洋の長所は、遷りかはるといふ事を知らんことはないが、併し變らない方から抑へて、その不變の上に變化のある事を見て行くように人生觀がなつて居る。それ故に人生觀の根柢にも一貫して居る大本を抑へようとする、道德に就てもさうである國家に就てもさうである、社會に就てもさうである。だから夫婦の間でも婚禮の曉にモウ早や死ぬ覺悟までして行くといふやうな譯である。何も死にに行くのでない位の事は知つて居る、けれども夫婦の盃をするその時に於て、最後の訣別の所まで考へて居る日蓮聖人が「先づ臨終の事を習うて後に他事を習ふべし」と言はれたのも、これは婚禮の場合ばかりではない、すべて生活の根本に人生を貫いて死の刹那まで考へて、さうして朝飯も食へといふことになつて居る。それほど東洋人は一貫した思想に立つて居るのである。然るに西洋の文化はきれ〳〵に變化して行く側ばかりであつて、恰度綱渡りをして居る、

職業師が傘をさして片方の足で綱の上に立つてヤーッとやり居るやうなものだ、一つ踏み外したらズドーンと落ちてしまふ、その危い綱渡りの藝當を上手にやつてお手拍子喝采といふやうな譯ぢや。渡つたのは洵に結構だけれども、萬人が綱渡りをして人生生活をやるといふ譯には行かない、やはり健實な大道の上を歩かす方が宜からうと思ふ。西洋人は非常な危險な思想の上を綱渡りの藝當をやつて居る、巧みに渡り得た者は誇つて居るけれども、そんな者が渡り得たからといつても、それは特別に左樣な事をしただけのもので、そんなものを人間の世の中の道とする譯にはいかぬ。人間の道は綱の上を渡らすやうな事をやつて行けるものではないのである。「だから大道砥の如し」と東洋では言うて居る、佛敎で言へば「三世諸佛一貫の道」といひ、「前佛後佛同道」といつて道を同じふするといふ事が原則である、儒敎で言へば「先王の道を行ふて過つ者は未だ曾て之れ非らざるなり」で、古今に通じて渝らぬやうな道を先王は傳へられて居る。だから敎育の勅語には、「斯の道は皇祖皇宗の遺訓にして子孫臣民の倶に遵守すべき所」といふことになつてあらはれて居る、これが東洋思想の特色である。であるからこれを保守的といへば保守的だけれども、保守だの進取だのといふのは變化を前提にして起る言葉である、萬古不變の道を守るには保守も進取もない、今も昔も變らぬ一貫して行くべきものぢや。保守といふやうな事は變化を前提としてあらはれる言葉である、そんな事にだまされる者は安本丹である。夫婦仲好くするといふのが保守だの、親孝行するのは保守だの、お日樣が明るいと言つたら保守だの、さういふ事は

ない。それは保守も進取もない、古今變らぬ眞實を抑へたものは、即ち日々に新にして而も萬古變らぬものである、その妙味を抑へたところに東洋文化の妙處がある。今日は神田の中央佛敎會館に東洋文化振興會といふものゝ講演があつて、それ〴〵の人が出席して講演をされるさうで、洵に結構な事に考へる、自分も閑であつたら聽きに行つて見たいと思つたけれども、こちらで講演をしなければならぬものだから、どういふ事を話されるか、聽くことは出來ぬけれども、まア今私が言ふやうな事を皆言ふ譯だらうと思ふ。けれども今日の彼の講演に出る人々が、佛敎といふものはあまり能く知らぬだらう、佛敎を能く知らぬといふと、東洋文化を振興するといつても、本當の東洋文化の眞髓を握つて居ないやうに考へる。東洋文化を代表するところの哲學にもせよ、宗敎にもせよ、倫理の根柢にもせよ、本當の文學でも、東洋文化といふものゝ大事な所は殆ど若佛敎が握つて居るものである、佛敎を研究せずして東洋文化振興會といつても、そこに力の入れどころがはつきりしないぢやないかと思つて、聽きに行かない前から心配して居るやうな次第である。そこでこの「いろは」歌が必要になつて來る、誰でも「いろは」がわからぬやうな者はないと一口に言ふけれども、今日の東洋文化振興會の學生が、有爲の奥山今日越えて居るまいと思つて、心配してこんな演題を出した譯である、そこが非常に面白いところぢや。それで、この歌の意味台と、その歌が佛敎から出た根本を話をして、それからその中の殊に「今日越えて」の所を徹底的に敷衍擴張してお話して見たいと思ふのであります。

「いろは」歌は無論佛教徒の手に依つて出來たものでありまして、弘法大師が作つたといふ說もある、その作者は議論があつて決定して居らぬけれども、兎に角佛教の思想を以て作られたものぢやといふ事に於ては異論が無い譯である。又佛教の思想でなければ了解し難いことになつて居る。この歌はどういふ工合に讀むのかといへば、

色はにほへど散りぬるを、我が世誰ぞ常ならむ、有爲の奥山今日越て、淺き夢みし醉ひもせず、京。

といふことになつて居る。この「我が世誰ぞ常ならむ」といふ所までが前段であつて、人生の儚なき有樣を示し、「有爲の奥山」から下はそれに對するところの信念解脫——佛教の信仰に依つて人生觀の確立することを敎へ、終ひの「京」の一字はいよ〳〵、人生の終に達して、さうして現在には法悅の生活、死後は佛に成つて行くといふところの、此の世は歡喜の華ひらき、死しては成佛の實をむすぶところを京の都に譬へたのである、死んで行く先は天國であり、淨土であり、又生きながらにしては信仰生活の妙味を握り得て完全なる生活に居る者を譬へたので、丁度京の都に行つて花を見たり踊りを見たりして居るやうな譯である。

「いろは」歌はこの三段に分れて居るのであるが、最初の「色はにほへど」といふのは、この人生の醒めざる生活はどのやうに榮えて居つても、生者必滅といつて必ずそれは滅びて行くものである。「色」は「色質」といつて、すべての物質を言ふのであつて、それを櫻の花が咲いたところに譬へた、或は人間でも男女の關係みたやうな所を「色」と言ふけれども、それは一部分を言ふのであつて、形あるもの悉くこれを色質と言ふのである。色の裏は「心」であつて心ならざる延長を有するところの物質は悉くこれを「色」といふ字で佛教はあらはして居る。「一色一香中道ならざるは無し」といふやうな事は、この色質の色と香を抑へたのであつて、佛教では色とか香ふといふ事はこの形ある物を指すのである。それは眼と鼻とに就て言ふので、それに音、聲を加へれば即ち耳が這入る、この眼、鼻、耳の三つのものが關係して居るのである。そこで「色はにほへど」と言つたのは眼と鼻との關係で言ふのである、櫻の花を見て、さうして花はにほいが良いといふやうな譯で人生の快樂に醉うて居るところが「色はにほふ」といふ事である。けれどもそれは直ぐ散つて行くのである、櫻の花が三日見ぬ間に散つてしまふが如く、人生のさういふ歡樂といふものは直ぐに消え去つてしまふ。それは人生の春はまことに短いものであつて、男女の關係にしても、女が妙齡になつて娘ざかりの時は實に春の花の咲いたやうに歡びに滿ちて居るけれども、それが嫁入して人の妻となり、直きに子供が出來てしまへば、モウ娘ではない、お母さんである、或はそれが離緣になつて今度はモウ嫁に行けぬといふやうなことになれば、それが爲に其の人の生涯は非常に淺ましき生活になるのである。身分のある人ほど一旦夫を持てば再婚は容易に出來ぬといふやうな譯であるから、半月嫁に行つて離婚になつてもそれで女の春といふものは蹂躙される、まことに人生といふものはそこは悲慘なものである。男の方は放蕩をするから春が永いやうだけれども、これもいろ〳〵そこに責任が起つて來る、只は遊べない、錢を拂はなければならぬ、それが自由になる者

は幾らか宜いやうなものだけれども、サウ〳〵自由にならぬ者の方が數が多いものであるから、行きたいけれども錢が無いといふやうな所に引かゝつて、なか〳〵男も相當に苦勞をするものである。元氣旺盛なれば旺盛なるだけ、行つて見たいけれども錢が足らぬといふところに於て、それだけ其の煩惱の刺戟に依つて苦しんで居る、大抵そんなやうなものぢや、だから誠に人生の色はにほふやうに見えるけれども、それは直ぐ蹂躙される、丁度上野の櫻花が咲いたと思つて居る内に、雨が降り風が吹いて散ると同じ事である、それは誠に速いものである。

さうして「我が世誰ぞ常ならむ」じ、この人生に生活をして居る者は、一人として永遠に生き殘る者はない、皆終ひには死んで行くのである。その死の襲うて來るといふ事も決してサウ永い事ではない、無常迅速と言つて何時來るかわからない。

後の世ときけば遠きに似たれども
知らずや今日もその日なるらん

といふ歌がある。後の世ナンといふ事をちよつと聞くと、來年よりはズッと先きの事のやうに考へるけれども、今年死んで行く者から見れば來年の方が遠いので、後の世の方が近い譯である。來月といふことも、今月死んで行く人から見たならば、來月の方が遠いのであつて、後の世の方が來月よりも近い。明日といふことも、今日死ぬ人の爲には明日の方が遠いので、後の世の方が近いのである。それは出づる息入る息を待たずといふことになつてしまへば、今日の晩までといふ方がズッと遠い、後の世の方が近いといふことになるのであるから、一いきの先きはモウ後の世である。その無常迅速といふことを考へ來ると、一人も殘る者はないのである。それで古來えらい人ほど左樣に人生の儚ないことを常に看破つて居る、あかん者ほど人生に醉うて居るから、人生の左樣な生死無常といふことを忘れてしまふものである。現代の文化は即ち死を忘れて居る、生存權といふやうな事を言つたり、パンを與へよと言つたりして騒ぎ居るけれども、モウ死といふ問題は眼中に置いて居らない、現代の文化は實に若い者の醉ばらいの議論である、死といふやうな事はテンで問題にしない、死んでしまへばそれつきりぢやないかといふやうな譯で、まことに粗末に考へて居る。古今聖者哲人と言はれる人は必ず死の問題を提へて居るので、孔孟の學に於てもやはり死といふことを屢々言うて居るのである。必ずや道を守らうとするに就ては死といふものに想ひ到るからして「朝に道を聞いて夕に死すとも可なり」と言ひ、或は「生を捨てゝ義を取る者なり」と言ふやうに「生」といふのは即ち生きて居る事、その生命を捨てるのであるから必ず生命といふ問題とそれから道といふ事を結びつけるのである、又佛教で言へば無論生命といふ問題から考へなければ信仰といふものは起つて來ない、今日の迷信に居る人達が成田の不動樣へ行くとか、或は柴又の帝釋樣へ行くとかいふやうな事をして居る人は死といふ問題を忘れて居る、皆現實に醉うて居る人である。それは道には來て居ない、儒教の方にも來て居なければ、佛教の方にも來て居ない、醉ばらひの仲間である、たゞ醉ばらつて喧嘩をするのと、不動樣にお參りするのとの違ひはあるけれども その精神に於て醉うて居る點に於ては一つである、それはたゞ人生の「色はにほへど」といふ所だけで

「散りぬるを」といふ所はモウ早やわからない、「我が世誰ぞ常ならむ」などゝ言つたら「アヽモウ言うて呉れるナ、鹽ふれ、鹽ふれ」といふやうな譯で、そこで早や逃げ出してしまふ連中である。まことに「いろは」の二行とは行かない「有爲の奥山」にでも行つたならば忽ちぶつかつてしまつて、何時になつても越えようといふやうな氣はテンで無い、有爲の奥山の山の裾をグル〳〵廻つて居るのみで、迚も一歩でも上に昇らうとはしないのが彼等の生活である。有爲の溷濁の中に頭を突つ込んで行くところの豚みたいなもので、上は少しも向かぬのである、況んや山を越えようといふやうな考は無い。豚でも猪でも少しも上にはヨウ昇らぬものである。それは猪などの棲んで居る山の近くへ行つて御覽になるとわかりますが、山から猪が出て來て畑の芋を掘りかへしたり、大根を喰つたりして仕方がない、それを防禦する爲に柵を作つたり石を積んだりして居るけれども、僅に二尺ぐらゐの高さに石を積んでさへ置けば猪はモウ來ないのである、それは下ばかり向いてグツ〳〵とやつて來るから。二尺ぐらゐの高さで鼻を突いてしまふ、上を向いて飛び越せば譯なく飛越せるのだけれども決して上を向かない、さういふものである。そこで今の成田へ行つたり柴又へ行つたりするのは猪と同じことで、二尺ぐらゐも石が積んであれば鼻を突いて後へ引返して來るやうな手合は、有爲の奥山などは迚も越える氣は無いのである。

左樣にこの人生はまことに儚ない有樣に在るからして、そこで茲に人間の心が働いて信念理想が動いて、人生觀を打立てゝ有爲の奥山を今日越えようといふことになつて來るのである、この「有爲」といふのは「我が事誰ぞ常ならむ」といふ無常なる人生有爲轉變の世の中、轉變といふのは遷りかはつて行くところの儚ない人生を言ふのである。その有爲轉變の人生がちよつと越えにくいに依つて、これを奥山といふ高いものに譬へた、それは越えて行く者から見れば山ではない、平坦な所だけれども、人生の酒に醉ばらつて居る者の爲には有爲の奥山がなか〳〵越えられない、殊に猪から見たら非常な高いものになつてしまふ譯である。その有爲轉變の迷ひの人生を一つ超越して——越えて行かなければならぬが、その越えるに就て「今日越えて」といふ所が吾輩は大いに氣に入つて居るところである。死んでから越えるとか、來年越えるとか、明日越えるといふのではない、「今日越えて」といふその「今日」といふ事が非常に大事である、これが佛敎の眞髓であり、日蓮主義の特色である。この明日と待たない今日すなはち有爲の奥山を越えて、さうして「淺き夢みし醉いもせず」で、人生の夢を見てそこに引かゝつて居つたけれども、夢ふかく陷らないでその夢が直ぐさめる、丁度淺い夢はコトツといふ音でもさめるやうに酒も少しは飲んで居つた、人生に醉ばらひかけて居つたけれども、併しそれはビールをコップに半分ぐらゐだつたものであるから、本當に醉はないでその醉がさめて、理想の生活、信仰の生活、本當に人生を見遣したるところの精神的生活に這入つて行くから、そこで京の都に達することが出來て、現在に於ては信仰法悦の生活が開かれ、死んでは極樂淨土の生活が開かれて來るといふところを「京」といふ字であらはした、つまり涅槃の都である。「涅槃」といふ事は現在に於ける信仰生活、死後の成佛、兩

方を結んで佛教では涅槃と言うて居るので、死んでからばかり涅槃して行くのではない、又生きて居る間だけではない、生きて居る間から不滅の我を見てその不滅の我が實現せられる所は一つに續いて居るから、モウこの信仰生活と成佛といふものは二つではないのである。掌を合せて居る時は不滅の我が體現して、その不滅の我がその儘全體あらはれゝば佛樣といふのであるから、信仰生活に居る者は丁度三日月か五日月のやうなものである、だん〳〵それが光を增して十五夜の滿月になるのである、五日の月と十五夜の月とは決して二つではないから、そこを一つの「京」といふ字で押へてあるのである。

編輯局より要望者各位へ

近來思想界混沌として幾多の不祥事相續で發生致し、彌々吾等の使命を意識するの强きは御同感下さるゝと信じます。

この秋に當り雜誌「統一」を宣傳するは、吾等の使命を果す上に於て重大なる意義有るものと思考します。「統一」誌は御熟知の如く本多日生猊下之を主宰して、日蓮主義研究と宣傳の類書中の最高權威の位置を以て、發刊以來廿八年を迎ました。就いては、この際益々、者を增加し、本誌をして廣く全國に普及せしめ度、、特にこの意味の徹底を期する爲、購讀料を一ヶ月金二十錢に減愼し、加ふるに內容は益々充實を圖りました。何卒吾等の徹意の存する處を御賛同被下て、大に新者御勸誘被下度御依賴申上ます

尙御盡力に對し左記條件を以て謝意を表します

一、新購讀者五名以上御勸誘の方は　本誌五ヶ月分贈呈

一、仝　十　名以上　仝　本誌一ヶ年分贈呈

一、團体にて新讀者廿名以上申込の節本誌廣讀料一割引

一、仝　卅　名以上　仝　一割五分引

一、仝　五十名以上　仝　二割引

一、購讀者勸募の爲め御利用の節は月後れ本誌五部金六十錢(郵稅共)の割にて御需めに應じます。

名古屋市東區田代町字城山常樂寺內

統一編輯局同人

我等如何に進むべきか

森川日修

（上ノ二）

佛教に我等を指導すべき原理を見出さんとせば、そこに容易ならざるものに逢着する。佛教とは何ぞやと云へば五千六千の大經典を含み其量の多大なるに驚く。從つて其說くところ耶蘇教の如く簡單なるものでない。故に初めて佛教をきくに際り茫洋として、普通人は諒解し難き感がある、佛教は釋尊の皆金言にして文々句々皆悉く大功德あり、一度その經典の文字を拜するだけでも不可思議〳〵の利益ありと信ぜし時代は、經典の文字は秘密眞言の微妙の功德がありしも、時代は過ぎた、經典の文字そのものに特別の功德があるのでない、內容に於て釋尊の眞意義を見出さねばならぬといふことになる、內容を知らんとせば、所謂る教者の教相判釋と云ふ難問題が生じてくる、其比較研究が各自の立場によつて又異つた見解を下すから、甲論乙駁書は山となり義は海となる、山の如く高く海の如く廣くするから人類救濟と云ふ問題よりも、高さ廣さの問題に沒頭することになる。

佛教に入れば苦集滅道の四諦が根本原理であるやうでもあり、十二因緣觀がそれであるやうでもある、又は六波羅密がそれであるやうでもある。數學者曰く四諦は聲聞の教、十二因緣は緣覺の教、六波羅密は菩薩の修行であると云ふ。其を解釋したところが

其は一の古典研究であつて我等を指導すべき原理でないやうに思はれる。我等は聲聞にあらず、緣覺にあらず、又た菩薩でもない、我等は地上に惱み、矛盾に苦しむ、平凡の人類である。此の地上に惱み苦しみつゝある人類をいかに指導するかは古典の研究でなく大正の佛敎であらねばならん。

人の惱みも有史以來漸次變化しつゝある、野蠻蒙昧の時代、得たものは力であつた、力あるものは他を制服し本能のまゝに行動することができる。彼等は本能のまゝ行動することが出來れば、それが彼等の目的で滿足である。故に力が人類を指導したものである。今日は力だけで人は滿足せぬ、智識、名譽、權勢等無限の欲望に滿ちた人類である、この智識、名譽、權勢等無限の欲望は悉く罪惡にして此を無にするが佛敎であるといはゞ、問題は至極簡單に決する。其れは人類を原始時代に復歸するか、又は人類を絕滅すればよいことになる。

エデンの園に狡猾しき蛇に詐むかれ、在樹の果實を食ひし罪惡の爲め我等苦しみつゝありとせば、その貪欲を起せし神を咀はねばならぬやうに、人類に生れしことがいかにも無念で、なぜ我等はアミーバならざりしかを後悔せねばならぬ。

敎學者の說によれば十界は常住であると云ふ、しかれば人類の絕滅はないことであらう、よし此の地球は漸次冷却し更に瓦斯體になるとも法界に人類の絕滅はないものであらう。故に菩薩の衆生無邊誓願度も意義あるものであつて、我等は別にアミーバに還元するの要なく、我等は進み進み此の人生曠野を進み、綠の野に清き水を見出さねばならぬ、さればその清き樂しき野にいかに進むべきか。

古代埃及に、波斯に、希臘羅馬に、印度に、多くの神々があつた、其神々を一神に纏めるには長き時間と多大の努力を要した。神秘的に或は啓示的に、多くの神を寫象するは野蠻時代の通有性である、各々見る處により神々を作り、各自の欲望を基準として犧牲を供した、然るに其時代の智者は多神で滿足せず一神を創造し、一神を基準として人類を指導せんとし、又は政敎一致のもとに自己の權力を扶植せんと努力したものである、印度の婆羅門敎、メッカのマホメットは其雄なる者である。

第六世紀に亞剌比亞沙漠の西南涯に呱々の聲を擧げ、年四十にして天啓により右に劍を持ち左にコーランを捧げ、世界を驚倒せしめた快男子はマホメットである。

劍は天堂地獄の鍵である、神敎の爲に流す一滴の血、一夜の陣は二ヶ月の齋戒祈禱に優る功德がある、戰場に墮るゝ者には奈何なる罪業も消滅し、最後の審判の日至らばその創痍は朱砂の如く輝き麝香の如く薰り、失はれし手足は天使の翼を以て補はれん。

聖徒は熱狂した、戰場の血は天堂を飾る華塡である、進軍の喇叭は天使の音樂である。彼の宣傳後僅かに百餘年にして、東は慈嶺印度河東より、西はビレネー嶺、西は大西洋上に及び、北は裏海黑海より、南は印度洋亞弗利加の大漠に抵つた。斯の如き猛烈神速の神敎は史上の一偉觀である、まして現在に於ても回敎徒の熱烈は他宗徒の及ばぬところであるとのことである。

印度の古聖は歌ふた。

梵は不滅なり、最高なり、その自己の本性を我身と名く。萬有の本性を生成すべき眼開の業と名く。

有身とは可滅の本性なり、天身とは原人なり、有身者の上首よ、維性身とはこの現身に於ける我れ自身なり、臨終に肉身を捨て、我のみを憶念しつゝ行くものは、我が存在に入るべし、是れ更に疑なし。

我を不生なりとし、無始なりとし、世界の大自在主なりとして知るものは、人の中に於て迷亂せず、一切の罪惡より解脫すべし。

理性、知識、不惑、忍受、眞實、調御、平和、樂、苦、有非有、長、無長、無敵、平等、滿足、苦行、慈善、冬雪、不冬雪、は我より申じたる群生名稱の特性なり。

我は一切の本源なり、一切は我より轉現す、智者は斯く信じ、熱情を以て我を禮拜す。

心を我に寄せ、生氣を我れに向はゝめ、互に覺醒し、我に就て談しつゝ、彼らは滿足し歡喜す、我は唯彼等に對する慈悲の心より、彼の自性に住し、輝ける智の燈を以て、無智より生ぜる黑闇を破る。

婆羅門族は最高神の口より生れた、故に彼等は靈の上には祭司長であり、權勢の上には最高族であつた。

釋尊は是れに滿足し給はなんだ、釋尊は最高神、創造神は認められない。傳系的の最高神を認むるならば釋尊の苦惱はない、釋尊は人類指導の原理を他に求められた、そこに釋尊の眞智があり、非凡の勇氣を要した。

釋尊を悉達太子の成道したものと見るか、慈悲顯現の如來と見るかゝ問題となつてくる。悉達太子の成道したものと見れば釋尊が輕いやうであり、慈悲顯現の如來と見れば餘りに高遠のやうにも思はれる、故に　は中間の人格的のものを視つめることにもなる、教學者はこゝに於て小乘、大乘、權大乘と區別し論爭することになる、釋尊の見方によつて自然教理の見解を異にし、その區別によつて行證も相違してくる。

釋尊を悉達太子の成道せしものと見るが是か、慈悲顯現の如來と見るが非か、又は中間人格的のものを寫象するがよいか、古典研究の上でなく我等に直接關係ある問題として視つめて見たい、悉達太子の成道したものと見ることは、我等の地上に惱み常に肉と靈の苦戰と懊惱のいかに深刻なるものかを話るやうに思はれ、慈悲顯現の如來と見れば我等の靈はいかに偉大に幽遠なるものかを知ることができるやうに思はれる。中間の人格的即ち佛格は肉を否定し靈のみを視つめる思想表現であるかを知ることができる。

人は肉のみを肯定するか、靈肉一致を肯定するか又は靈のみを肯定するかの三をいでない。肉のみを肯定せばそこに道德も倫理も宗教も習慣も皆無益なことである、道德、倫理、宗教、習慣、儀禮等は總て人心を束縛し、窮屈にするからである、人は放縱主義、享樂主義、刹那主義が理にかなふ道である。現在の教育は此の問題を解決せず、心に肉のみを肯定し口に道德倫理を說く、いかに德目を陳列するも何等効力なきものである。

靈を肯定するものは、人生の矛盾と、免れ難き苦惱と、科學的未解決を靈の一面に歸し、靈は矛盾のなきもの、快樂のもの、絕待のものとして靈を視つめるのである、靈を極度に純化し靈のみに集注せば勢ひ肉を輕視することになり、人生の解決を靈に求むるのである、故に道德習慣等を極度に否定するか、又は一種の運命觀に陷るものであつて、靈を高調するものゝ內、時に普通人より甚敷く墮落するはそこに缺點が生ずるのである。

悉達太子が玉衣寶冠を脱し、愛着やむなき妻子眷屬を棄て、娯樂極りなき雲上の生活を嫌ひ、孤然宮城を去りて深〻密林に隱れ、苦行骨立地に倒るゝに至る、太子は肉と靈と悲慘なる戰である、人は本能の生活に享樂を見出すも此の享樂は永續の者でない、假りに享樂意のまゝなりとするも二十年三十年百年を出づることはできない、肉は苦のもの、空なもの、無常なもの、無我なるものとせば、一として執着すべきものでない。然らば知るべきは涅槃である。そこに阿羅漢の小乘教が產れる、阿羅漢の智見は極度に肉の否定である。是れ人は肉を肯定せんとする迷妄を破る一爆烈彈である。この砲彈に破れしものはたゞ一塊の腐肉である。

此の兩足の身は人に愛せらるれど、不淨、惡臭にして、種々の汗穢、其の中に滿ち、又處々より滲み出つ。

隱れたる處は蹄のために、魚は鉤のために、鳥は網のために惱まさるゝが如く、凡夫は惱まさる。愛すべき色・聲・香・味と、所觸と、此等の五種の慾は婦女の身にあるを見るべし。

愛樂の心を以て此等の婦女に交はる、凡夫は恐しき墓田を讀げ、再生を積むものなり。

此等の婦女を避くること、足、蛇頭を避くるが如くするもの、彼は正念にして、世に此の勝者を伏す。

諸慾に患難あることを見、出離を安穩なりと見て、あらゆる慾より離れ、我は滯結の滅盡に達せり。

とサッパカーマ佛弟子は述べてをる。

思惟の正しからざるよりして、我は欲染に惱まされ、心從順ならずして、散亂せしことあり。

煩惱の爲めに四へられ、樂觀に從ひ染著心の時となりて心の平安を得ざりき。

痩せ膚色衰ばみ、又醜くなりて、我は遊行すること七年、晝夜苦み惱みて樂を得ず。

其より繩を手にして、森林の中に入りぬ、我再び昔生活をなさんよりは、此處に縊るぞ宜しきと思ひて。

繩を堅くして樹枝に縛り、繩を頸に投げし時、我が心解脫を得たり。

どシーハー女弟子は語つてをる。

いかに肉を否定するの困難なるよ、阿羅漢の見智容易なものでない。此の見智を突破して大乘の眞智に到達せんとするもの勇猛精進せずしてかなふべきでない。

こゝに於て人に最も都合よき、權大乘が顯はるゝ。それは肉は人力の制しきれぬ愛着煩惱がある、その愛着煩惱はそのまゝとし、靈の世界に又は靈の救ひに慰安を求むる思想である。

さればよきことも、あしきことも業報にさしまかせて、ひたへに本願たのみまいらすればこそ他力にてはさふらへ。(歎異抄)

はじめて佛のちかひたゝせはじむる人々の、わが身のわろく、こゝろのわろきなおもひしりてこの身のやうにては、なんぞ往生せんずるといふ人にこそ、煩惱具足したる身なれば、わが心の善惡をばさたせず、むかへたまふぞとは申候へ。(末燈抄)

いかにも都合のよきことである、人生はしかたがない、靈の救ひに惡のまゝにまかせることであつて誠に結構であるが、此れは凡情を基準とした一時的慰安の方法であつて眞理に到達したものでない、人心の要求により、彼の一神を創造するも、彌陀の願力に集注するも同じく靈の一面を觀つめた思想であつて、人生を無視し、人類を無價値たらしむる考察である。基督教に於てはすくなくとも、今日の基督教に於て一神のもとに罪惡觀を設定し人類を指導せんとするも、彌陀の信仰の如きは恰ど善惡の基準がない、或はいはん絕待彌陀の本願より世上の善惡は塵の如しといはゞ、それは人類を指導すべきもので

なく一種の蜃氣樓である、沙漠を旅行する人々は時々樹木茂り清泉湛ふ者を發見する、彼等熱沙に吹かるゝ蹟は、狂喜してその綠林に赴く、彼れ行けば林は更に遠い、心附すして此を追ふ者遂に沙漠の鬼となる、中間的佛格の寫象は恰も沙漠の蜃氣樓の如く小乘と大乘の中間に顯はれしもので、人の苦悶の熱と水を求むる思想と交錯し一種の顯はれをなしたものが權大乘の思想である。

釋尊深山に瞑想苦行數年われ菩提を得ざれば、こゝを立たずと、金剛座に結跏趺座し給ひたる釋尊は、肉を捨てんか、靈を捨てんか、肉は惡魔の顯現となり、靈は涅槃の直觀となり、肉と靈は時に分離し、時に結合した、結合し分離し鬪爭し紛糾した、時に小釋迦たり又た大釋迦であつた、時に悉達たり時に眞理そのものであつた、宇宙は我か、我は宇宙か、有限か無限か、無明か菩提か、生死か涅槃か。

往昔、造作せる功德の利もて、心の所念の事、皆成ずるを得て、速疾に彼の禪定心を證し、又復涅槃の岸に到る。

有ゆる一切の諸怨敵たる、欲界の自在魔波旬も我を懼ます能はず、悉く降伏す、福德智慧力あるを以てなり。

若し能く勇猛に精進を作し、聖智を求めば、得んこと難からず。

既に得ば、即ち諸の苦邊を盡して、一切の衆罪皆除滅せん。

一切の樹木は華果を生じ、虛空は清淨にして塵霧あるなく、雲自ら起つて微細の雨降り、天は音樂を作し種々の曼陀羅華は繽紛として下り、一切の苦惱あるもの、恐怖あるものなく、顚狂のものは本心を得、啞者は語り、聾者は聞くを得た。

眞智開き、圓光輝き、法は人なり、人は法なり、法と人と一如である。悉達は眞理、眞理は釋迦であつた。實に如來であり、法身である。有限生命の釋迦にあらず、無限空漠の理でない。理にして事、事にして理である。洵に妙法であり、蓮華である。妙法蓮華の當躰である。

道を成就し給ひし如來は、久遠の如來であつた、肉にあらず靈にあらず、靈肉一如の如來である。

如來を普通三身と見る、三身と見て、そこに敎學問題がからまる。曰く法身は理なり不可見身なり。報身は智なり、可見あり不可見あり。應身は事なり、應現可見の身である。幽遠の理佛と考察すれば特別得きものとの思想より三身各論の上の大日如來等の法身佛が生ずる。智慧を抽象し人格化し肉を離れて靈を觀つめ、そこに彌陀等の報身佛が顯はれる。肉の方面のみを實なりとして小乘の釋尊に限るとの思想も起る。

これ等いづれも靈肉二元のものでない。如來は一である、成道の悉達は即久遠の如來であり、久遠の如來は即悉達である。實に靈肉一如顯現の如來である。

三身各論上の法身でなく、法と人と一如の法身である、肉を基準としてそこに敎學上の小乘あり、靈を基準としてそこに權大乘があり、靈肉一如にして實大乘の敎義がある。

迷門には但是れ始覺の十界互具を說いて、未だ必ずしも本覺本有の十界互具を明さず、故に所化の大衆能化の圓佛皆是れ悉く始覺なり、若し爾らば本無今有の失何ぞ免るることを得んや。實に知るべし四敎の四佛則ち圓佛と成るは且く迷門の所說なり、是故に無始の本佛を知らざれば無始無終の義缺けて具足せず、又無始色心當住の義なし。（日蓮）

法と人と分離すれば、我等を指導する原理は二元

的にならざるを得ない。二元なるが故に理の大日如來等が、事の諸佛菩薩に現れ、是を象徴する種々の偶像が生じ、偶像と我等は二者の對照になる、人は兎角相對的に何者かを求めんとする情がある、自然崇拜然り、一神崇拜然り、彌陀崇拜然り、此等の對象は智識の差により異なりとするも、悉く同一思想系に屬するものである。

法と人は一如なりといへば、人は又た神佛は唯心なり、心外無別法なりとして、凡智凡慮の上に心外無別法を論ずるに至る。こゝに又た誤謬が生ずる。彼等釋尊の如く、肉に懊惱し、肉に打勝ち、不斷の努力と、精進と、叡智を有するか、多くは闇迷愚識の輩である。なんとて法人一如の境智に躰達し得るものぞ、彼等この境智を得たるものとして、指導せんとするが故に多大の害惡を及ぼすのである。法人一如の眞顯現としては、唯一の如來あるのみである、我等直に唯佛與佛の境智に突入することを得んやである。

然らば我等何を指導として人生の曠野を進むべきかの眞劍問題に面せねばならぬ、我等を指導すべき原理はどこにあるか、彼れにあらず、此れにあらず、法である。

法は至玄幽妙にして、我等の智識到底全部を言ひ盡くすことは不可能である、如來は人類の語を以ては不可以言宣とのべられしはそこである。

我等の智識を以ては徹底し難き故に菩薩行、大精進、大勇猛の必要があるのである。しかし我等は屈してはならん。大精進大勇猛心を喚起してこそ、初めて偵浮盲龜の大光榮を喜ぶことができるのである。

（以下二八頁へつづく）

國民精神の涵養

本　多　日　生

四、三數の數化

も一つ大切なものがある、それは三數の數化であります。國民精神は數化によりて導かるゝので、どれほど氣候が良く、風光が美しくても、それ丈では優秀なる國民精神は養成されない、却て氣候が良く風光の美しい所に遊ばせておけば、放蕩息子が出來るのである、大根や午蒡を作るのならば、氣候の良い、地味の佳い所であれば、必ず良いものが出來るけれども、人間を作るには左樣な譯にはいかない、優秀なる國民精神を作る第一の力は數であります。それ故國民精神の涵養に就ては三數の數化を復活しなければならない。三數とは、我國の神代から傳りし惟神道、支那から渡來せし聖賢の數、印度から傳りし佛陀の數である。

惟神の數の精髓は國に關する意識を數へたまふたのである。我國の神樣は信心の仕方や、鈴の振り方を數えたのではない。國を經營し、國を通して一切の文化を建設することを數えられたのであります。故に神樣の御後裔たる天子樣を始として日本國の興隆を御考え遊されて居るのである、その爲には國を守るべきであり、國を守るには人民を愛せよ、國を思ふ故に民を愛せよと云ふ、之が皇祖皇宗の遺訓であり、帝王學の根本を爲すのであります。又國民學の根本を爲すものは、國民は國を思ふ故に天子樣を

大切にせよ、天子樣を大切にする事によりて民心が統一せられ、民心が統一さるれば國家は興隆を來たす、若し天子樣を忘れる樣な事になると、必ず民心が分裂する、分裂すると弱くなり、遂に國家が滅亡して、國民は奴隷の生活を味はねばならない、故に國を思ふ故に天子樣を大切にせよと云ふのが、惟神の敎であります。國家には第一團結力が大切である力がなければ、國家に正しき主張があつても之を貫く事が出來ない、國に團結力があり、威力があれば其の國を代表する者の意見が通る事になる、世界を旅行するにしても、國の證明がなければ何處へも行く事が出來ない、貿易をするにしても國家の保護に俟たねばならない、學問の進歩にしても國が亂れては駄目である、一切國家によりて保護されねば何事も出來ないのであります。所が我國は上に皇室があり、下に六千萬の國民があつて、三千年間理想的の團結をなし來つたのであつた、若し此の團結を破るならば一切メチャ〳〵になるのであります、然るに近來國に對する考が薄くなつて來た、それは惡い思想に欺された爲である、どんな風に欺したかと云ふと、「人には何が一番大切であるか、それは女房が一番大切である、戀は純潔であり、尊いものである、昔は國が大切だと云つて居つたが、現代は戀が大切であり、女房を愛するのが新らしい文明である。又世の中は相互に親切を盡すのが一番大切な道德である、そしてその爲には國なんか廢して人間同士で暮せばよい、そうすれば稅金もいらないし、兵役にも出ない、誠に都合のよい譯だ」と云ふ。兵隊を無くして、他の國から攻めて來た場合には、知らない顏をして、戰なんかに出ないで横を向いて、芋を堀つてをればよい。かくの如くに說く者があるが、横を向いて芋を堀つて居つたならば、敵はその儘に歸つて行くであらうか、否、攻めて來た敵軍は占領した地方に軍政を施いて、そして建札を立てる。

我軍來りて此地を占領し、軍政を施く、汝等の芋と大根と二萬貫を、明朝迄に軍政署に持參せよ。

これが分らないからくだらない事を云つて居つて、いよ〳〵になつてから「とんだ事が出來ました」と後悔するのである。名古屋なら名古屋を占領すると專門家が研究をして、名古屋市の負擔力は何億萬圓が極度であるかと調べておいて、「明朝迄に何億萬圓を軍政署へ提供せよ、若し否めば爆彈を以て名古屋市を爆破せん」と警告し、現金を差出さねば直ちに爆破さるゝのであります。そう云ふ事になつてからどんなに慌てゝも仕方がないから、國の大切な事を忘れるなと敎えたのが惟神の敎である。

次に聖賢の敎の大切な點は義の敎であります。義とはすべき事をする、すまじき事をしない、先にすべき事を先にし、重ずべき事を重ずるのが義である。女房を愛すると云ふ事は惡くはない、然し女房の外に親がある、饅頭を買つて來た場合に、饅頭を母親に差上げないで、女房にやつたとしたならばどうか女房を愛する事は惡くはないが、親を忘るゝ所に不義がある、先づ持つて歸つた饅頭を母に差上げて、それから次に女房に「お前も一つ」と云ふ事になつて正しいのである。所がこの事が現代の人には分らなくなつて來た、故に有島事件の如くに、親を捨て子を捨て、理想を捨て、職分を捨てゝ、他人の妻と情死をして、而も之を誇りとして居る。厨川白村が

「近代の戀愛觀」を書いて之を讃美した、「戀が頂點に達すると死にたくなる處か値打である、そして若い青年が猫入らずを呑んで自殺をする、死ぬ時は愉快である、心に戀を抱いて死んで行く、實に美しいものだ」と書いた。「女が夫の腕に抱かれたまゝ、何の苦もなく死んで行く、息氣が絶えてから閉ぢた目をも一度開けて見たら、嬉しそうに輝いて居つた」そんな馬鹿な事を書いてゐる。かゝる事を書いて青年男女を煽動して金を儲けて居たのであり、馬鹿な青年男女には欺されて死んだ者が多〻あつた、可愛相な譯であります。所がかう云ふ事柄が義の敎によると明瞭になるのである。義とは、國にあつては國の恩、家にあつては父母の恩が、戀よりも大切である、國家の前には時に戀をも犧牲にせねばならないと云ふのが義の敎である。故に赤穗四十七士の如き忠義が大切であると云ふので、大石良雄は妻を但馬へ離しておいて自分は四十七士の頭梁として、千身萬苦の末遂に怨を報じた、故に義士と稱せらるゝのである。若しあの反對に、一力樓上で女に溺れて、愈々仇討の夜になつて肝心の良雄の行方が分らないよく探した所が、隅田川の上流で若い女と頸を吊つて居つた、と云ふ事であればどうであらうか。この義の道德を重んじなければならぬ、之が國民精神涵養の秘訣であります。故に人道主義と國家主義、個人主義と國家主義、宗敎と國家の關係、其の他いろ〳〵の西洋の思想が、丁度お化けの樣にやつて來て思想界を惑亂せんとしても、一度義の燈火を點ずれば直々お化けの正體が分る、そこが聖賢の敎の貴き所以である。

も一つは佛陀の敎であります、之は何う云ふ敎かと云ふと、信仰を敎えたのである。信仰とは何であるか、如何なる苦みに出遭ふても信仰の力によりて之を切り開き、心の平和を破られないのである、掌を合して信仰に生きる時、どんな心配な事が來ても少しも脅かし得ない、一心合掌の力は人生を襲ふ一切の苦みを追拂ふ、そして花咲き鳥笑ふ樂土を人生に躬驗するのである。信仰に生きれば極めて快活な氣分になつて來て次に良い事を仕樣と考へるのである。職工が機械を働かす場合には必ず油を注す、例へば汽車が東京を發して下關に向つて走つて行くのに、若し車に油を注さなければ直ちに火を發する、油を注せば火を發しない、何故かと云ふに、油だけ鐵と鐵との間に薄紙の樣な空隙が生ずる爲である。所が佛敎の信仰と云ふのは人生の油であります、若し信仰がないと、人生の一切の問題は利欲の衝突で鐵と鐵が軋る如くになる、信仰に導かるれば、スラリ〳〵と滑かに解決される、資本家の頭にも油が注がれ、勞働者の頭にも油が注がれて、一切の問題が平和に解決されて行く、それが佛敎の信仰の價値であります。

そこでこの三つの敎、國を思ふ心と、義の道念と信仰の力とが、美しい我が民族精神を涵養したのであつた、根本には國體が卓越し、國民の性向が善い上に、この三敎の敎化が登んであつたから、國民精神はよくならざるを得ない。丁度立派な體格の婦人に、理想の夫があり、それが溫泉に行つて養生をして、御馳走を食つて居たら、どうしたつて良い子供が生れる、之が國民精神である。女が何んな立派な身體であり、夫が又壯健であつても、少しも御馳走を食はない、營養不良であつたならば決して良い子

供は生れない。三教の教化を忘れたから、國民精神が衰へ、皇室の尊嚴が分らまくなり、色々な不祥事件が生ずるに至つたのである、三教の教化を昏ならしめ、以て國民精神を涵養し、倉々國本を固くし、そうして世界の文化に貢獻すべきであります。（完）

福音

大僧正本多日生猊下講演

國民精神の涵養

國民精神作興の詔書の綱領を本多猊下の講述せられたるもの—大慘害に當面せる國民の覺悟—の姉妹篇として出版しました、是非御講讀を

一部金五錢郵税金貳錢
百部金參圓五拾錢送料共

發行所　名古屋市東區田代町字城山常樂寺
統一編輯局
（電東五四八七番）

（二二頁より續く）

我等は法に一致せんとて如來に歸命し、人法一躰の境智即ち如來の境智に進まねばならぬ。

こゝに於て法に一致せる行動は善、法に一致せざる行動は惡といふことになる。例へば國家の人造の法律に皆けば我等は人造の獄に投ぜらるゝやうに、法に脊むけば法の地獄に墮ること何の不思議もないことである。

法とは何ぞや、曰く妙法蓮華である、妙法蓮華に脊く是れ謗法である、謗法とは法に背反することである。故に謗法を根元として種々の罪惡行はれ、人生の行路を闇憺たらしむるのである。然らば妙法蓮華が何故に人生の指導原理であるか、何が謗法にして人生を惱ますか、更に稿を改めて述べて見たいと思ふ。（上終）

國防上の急務

陸軍少將　細野辰雄

四、軍備問題

次に申し上げたい事は外國の武力侵害に對する兵備の充實と謂ふ事である、華盛頓會議は世界の平和を保證したる福音の如く傳へられて居る、然し乍ら彼の會議の席上に於ける英米の態度は果して互讓的の精神を以て我に望んだと思へるであらうか、英米の提出したる五五三の戰鬪艦の對比制限は、英米の命令的發案であつて、我日本側には議論の餘地を與へなかつたではないか、日本の提案十七は見苦しく一蹴し去られたではないか、而して其當時日本側に取りて有利と認められた戰鬪艦の精鋭は、大なる削減を加へられて、英米側に最も都合よき事に解決せられたのみならず、港灣防禦施設も日本のみ非常な制限を加へられたるに係らず、英米側は其本土より遙かに遠隔したる港灣迄も縱に堅固なる防禦設備をなしをるではないか、殊に日本に取りて最も不利の問題たる空中戰鬪力の制限は全く問題外として顧みなかつたではないか、而して是を以て東洋方面の平和を確保するのだと申して居るのだ、即ち英米は攻勢守勢共に日本に對し何等脅威を受くる事が無くなつたから、英米南國は自國の爲には平和を確保せられたであらうが、日本は何れか一國に對しても漸く本國に引籠りて守勢だけは辛うじてどうかこうか保ち得るかは知れぬが、攻勢的能力は全く阻止せ

られたのではないが、然るに我國民の輿論はどうであるかと見まするとと、華盛頓會議にて少くも十年間の平和は保證されたから最早兵備はどうでもよい、軍縮は世界人道の爲め最も大切な問題だから陸軍も師團の數を半減せよとか、兵役年限も一年餘に切り詰めよとか、而して平和來の聲は一轉して軍備呪咀の聲となり武力を輕視する樣になつたのである、孫子は「其の攻めざるを恃む勿れ、其の攻むべからざるを恃め」と謂ふて居る、諸君英米國は華盛頓會議の結果矢張り我國に向つて攻め來るだけの海上戰鬪力は持つて居るのである、唯だ我日本近海迄攻め寄するとなれば彼の五と我の三とが略ぼ平均して五分五分となるだらうと謂ふ位に過ぎぬのである、數の上で五分々々だから安心と謂ふわけに行かぬ、然るに斯くもはかなき材料を根據として、もう外國から攻めて來ないと謂ふた所で、唯それだけに依賴して全く武備を輕視すると謂ふ事は寔に思はざるの甚だしきものでありまして、我々は海軍の方は攻めて行く事は出來ないが、敵を本國近く引き受けて五分々々の戰爭をせなくてはならぬと謂ふ羽目に陷りても二分の一の公算しかない海軍にのみ賴るわけに行かぬから、せめて海軍不利の場合でも、陸上だけは外國軍の蹂躙に遭ひたくないと謂ふ考があるならば陸上兵備の削減まで餘り極端にやつてはならぬと謂ふ事に氣が附かなくてはならぬのである、然るに唯だ戰爭は當分なからうと謂ふ雲をつかむ樣な事を宛てにして、兵備を疎かにするなどはお話にならぬ馬鹿げた事だ、現に世界の平和とか正義の道とか盛んに稱へて居る米國は、其建國以來約百五十年の間に百數回の戰爭をして居るではないか、日本を侵略主義だとか好戰國だとかけちを附けて居りながら、米國の侵略した土地は日本の擴張に比し數十倍の大きなものでないか。而して今や北はアラスカより瓜哇巴那馬、グアーム、比律賓と謂ふ工合に、北より東を經て南に亘りて恰かも半圓形に日本を包圍する大領土を占領して居るではないか、尙ほ其上に東洋の利權獲得に彼の飽く事なき爪牙を磨きつゝあると謂ふ現狀に對し、それでも何の備ふる所もなくして依然我が自主的地位を保ち得るや否や、現在世界各國の狀態を見ても國民の團結力が薄弱で、武力の嬰弱な國は支那や印度の如く如何に其領土が大であつても、世界各國より直ちに輕視せられて三流四流の取扱ひを受けねばならぬ羽目に陷る事は火を睹るより明かな事實はなからうか、それでも尙ほ武力を輕視し軍備を薄弱にして宜しいと思ひますか、今日は文化々々と叫ぶけれども、國民文化の程度高き白耳義や和蘭を御覽なさい、矢張り世界列國の間に伍しては三流四流の取扱ひを受けて居るではありませんか國民をして武力を輕視し、軍備を怠らしむる聲は國家を呪ふ聲と少しも異なる所がありません。

我國の軍備に對し其數が多いとか、教育年限が長いとか云ふ問題よりも、先づ國民の考が尙武的氣象を向上し、犧牲的觀念の發達に努むるが先決問題ではなからうか、現に米國が今日やつて居る樣に、國民一般に軍事的教育の普及徹底を計る樣に官民擧て其方に力を盡す樣になれば、常備軍の兵力は大に削減しても武力國防の上に差したる缺陷を生ずる事なく、有時の際は國民動員に依つて優に國防の能力を支持する事が出來ようと思ふけれども、現今我國の狀態では仲々左樣な有樣ではないのである。一般に尙武的氣象や犧牲的觀念が餘程薄くなつた事は爭はれぬ事實で、今や軍縮の聲と共に俄かに陸海軍の將校生徒の出願數に大なる影響を及ぼし、其志願者の數を著しく減じたるのみならず、其素質も非常

に低下したと謂ふ事である、是では軍備の上に最も大切なる優良なる將校を得る事すら大に悲觀せざるを得ないではないか、又中等學校の生徒の中には兵役を厭ふ氣風が可なり旺盛で、智的教育の增進には全力を傾倒するが、德育や體育には餘り氣乘りがせない傾きだと謂ふ事だ、殊に徵兵忌避者の數は表向きでは左程には增加せぬ樣だが、徵兵除けの祈禱は內密に可なり繁盛して居る模樣である、故に軍備の縮少をなさんには先づ是等の弊害を除去する樣に國民の考を一新せない限りは、獨り軍備の縮少のみやるならば、茲に國防上に大なる缺陷を來す事となり其上國民が各自利己心の增長にのみ囚はるゝ樣では我國を第二の支那に陷らしむること疑を挿む餘地がないのである。

抑も武力の上に最も大切なるものは、國民の精神力に次で體力である、旺盛なる献身的觀念は崇高なる道德觀念より出發するもので、體力の養成は艱苦缺乏に堪ゆる如く鍛錬を必要とするのであるが、事實は全く是を裏切るものが多い、英米諸國では中等學校の生徒は夏季休暇を利用し、長きは一ヶ月も陸軍野營地に野營して軍隊教練を熱心にやつて居るに反し、我國の學校では修學旅行と稱して汽車に乘り旅館に宿泊し、成るべく歩行く距離を短縮して、名所古蹟をぶら〳〵する位が關の山ではないか、國民殊に教育家は一刻も早く此點に目覺めない以上は、軍縮どころの騒ぎでない、故に軍縮は寔に結構な事でありますが、先づ國民の考を一新し、教育の方針を改善し、質實剛健の教育を鼓吹して、其成果の見るべきものがない限りは、軍備の縮少は國家の現狀並に將來の爲め甚だ危險を感ぜずには居られぬのである、由來尙武を以て建國の理想として居る我國の現狀と自由や平等を口癖せの樣に稱へて居る英米諸國の現狀とは　其軍備に關する國民の意氣込は今や全く轉倒したる感があるのである。國民の大いに覺醒すべき大問題ではなからうか。

尙ほ武力國防の上に我國の最も缺陷とする所は、空中防備の薄弱なる點である、飛行機は從來不安定なものとして危險視した時代もあつたが、今や安全な武器となり、又其高速度を利用し文明の輸送機關となつたのであります、而して是がいざ戰爭となると先づ强力なる多數の飛行機が數團となつて敵國を襲ふのでありまして、夫れには爆彈や燒彈を多數搭載して往き、敵國の都邑、橋梁、鐵道、港灣、兵營、倉庫等を燒擊爆擊するのであります、此の襲擊を受くることゝなれば、別けて燃え易き我國の家屋や倉庫は一朝に烏有に歸し、橋梁や鐵道は破壞されてしまふのだから、動員も出陣も全く出來なくなるのである、又戰場に於ても敵情偵察を上空よりするのみならず、寫眞術を利用するから一切のものは悉く寫眞に撮寫され、從來騎兵や歩兵の斥候で平面的に見たものより一層確實なる敵狀や地形を悉く知ることが出來るのである、又長距離よりする砲擊の觀測、敵の高等司令部其他軍隊の爆擊をやるのであるから、實にたまつたものでない、是に對しては地上より射擊を以て防がんとするも、其速力の快速なる爲め是を射落すことは中々困難であり、矢張り飛行機の攻擊に對しては飛行機を以て防がなくてはならぬのである。

然るに我國の飛行機は世界列强の間に伍してはお話にならぬ程劣勢でありまして、是には唯だ陸海軍の常設飛行機だけではとても追ひ付かぬのであります、故に各國は皆民間飛行の發達を奬勵して居りまして、其國民も飛行機に關する自覺がある爲め、民間飛行熱は盛んな勢ひを以て發達して居るのである。

最近米國のアイダホ州にて行はれた飛行隊の軍事演習は、或一定の地域を日本の東京市と假設し、是に對し空中攻撃の演習をしたそうである、其攻撃方法は先づ飛行機は假設地帶の上空に飛び、石油を雨の如く降り注ぎ是に引き續いて飛ぶ飛行機は燒彈を投下するのだからたまつたものでない、見る〳〵中に東京市と假設した一面の地域は火の海と化したのである、諸君正義人道を口癖の樣に叫んで居る米國では、國際信義上から見ても許す事の出來ない演習をやつたのであるが、萬一是が實現する樣な事があつた時は、東京市民は單に家屋倉庫の燒き拂はるゝ位では濟まぬ、市民の大部は殆んど遁るゝ事も出來ずに燒死せなくてはならぬ事となるのである、如斯正義人道は米國製の正義人道で、到底我々日本人の夢にも氣附く事の出來ない人道と謂はなくてはならぬのみならず、華盛頓會議の主唱者たる米國人が今に至るも相も變らず、日米戰爭を夢み、軍事方面に於ては常に日本を假想敵國とする觀ある事は、實に言語道斷と謂はなくてはならぬ、兎に角我國の空中防備は實に他の列强と比較にならぬ微力であつて、是が充實は唯だ政府當局者のみに迫つては相成らぬ、米國は勿論のこと、佛國でも、英國でも、民間飛行の爲に投ずる費用は實に莫大なものであつて、平時は旅客、郵便物其他の荷物等を飛行機に依つて運搬し、同行を約束した旅客は汽車に乘り遲れた場合は悠々と飛行停留場に行きて飛行機にて一飛びに目的地に行き、同行者の到着前に早く目的地に着して待つて居ると謂ふ有樣である、新婚旅行を飛行機でやるなんぞは決してハイカラでもなんでもない、當り前の事として居る有樣だ、然るに我國の現狀は實に是等の諸國に較ぶれば、實に何とも面目ない次第であるが、しかし唯だ面目次第もないと謂ふだけでは濟まぬ、一朝戰爭でもある場合には敵國は先づ是等の飛行機を利用してやつて來るから、いくら大和魂があると云つて威張つて居つてもどうする事も出來なくなり、唯だ手を束ねて國民の慘劇を坐視すると同時に、自分も家族も皆な彼が蹂躪に任せなくてはならぬ事となるのである、從來の戰爭は平面的であつたから、軍人が第一線に立ち戰つて呉れるから其の後方に控へて居る國民は直接敵の攻撃を受けずに濟んだのだが、今では戰爭は空軍が出來たので立體的となり軍隊だけでは敵の侵入を防ぐ網が張れなくなつたから、國民自らも其頭上の防禦をせなくてはならぬ事となつたのである、然るに我國民の飛行機に關する自覺の足らない結果、今尙ぼんやりして居るのは寔に寒心に堪へない次第である、今となりては餘程立ち遲れては居るが、我が資本家は勿論でありますが、多少なりとも私財の都合のつく人々は民間飛行界の發展に努力する樣大に奬勵せなくてはならぬ事と信じます、此點も武力國防の上に國民の覺醒を促すべき急務ではなからうか。

結論

要するに國防上我國の現狀に照し國民一同の覺醒を要すべき問題は多々ある中にも、思想問題、經濟問題、外交問題、軍備問題等に就き一層眞摯なる氣勢を昂上し、一人も殘らず深く思を是等諸問題の上に及ぼし、唯だ自己を本位としたる眼前の小問題にのみ沒頭する事を止め、是等諸問題は皆な他人のことではない、皆自己の頭上に降り掛つて居る緊急問題であるから、國民擧つて是等諸問題を基調とする國防の衝に當らなくてはならないと謂ふ事に、一日も早く目覺めて貰はなくてはならない。而して國民一同に是が覺醒を促す爲には、先づ國民指導の衝に當る政府當局者並に政府を支持する政黨政治家の

奮起を要すべきである、若し國民指導の衝に立つべき政府當局者並に是を支持する政黨政治家にして自縱放慢何等是等の重大問題に對しなす所無きものは國民一同の奮起に依つて是等無能の輩を驅逐し、國防的見地に立つて如上の問題に對し奮勵努力すべき政治の覺醒を促す事が、國民として大に努むべき問題でなからうか、此意味に於ても國民一同の政治的自覺に俟たなくてはならぬのである、以上國防上の急務に就き聊か所見の一端を述べ此講演を終る事と致します。

常樂庵隨筆

古田昴生

圖々敷てふこと

余、操觚界に投じて茲六年、其始め訪問の最も苦痛なりしを覺ゆ。

用有り、他家訪問を命ぜらる。羞恥の感深く萌し、其家の門前に至りて徜徉躊躇數刻、即ち籬の周圍を迂廻する事數度に及んで而して皈へる。辨用ならざる也。

然りと雖、今日に及べば他家開扉して尙餘悠あり、「御免」「今日は」の語は些の躊躇も無く出づ。

圖々しさ限り無しと雖、即ち用辨する也。

辨用の意を以つて之を推斷せば圖々しきも亦重要の職具に在らざる歟。

老姑新りのこと

一老姑在り、佛性深く七日目の墓參嘗て一回も怠りし事無し矣。

法會營るれば出でゝ參じ、法話開かるれば即ち出でゝ克く聽聞す誠に嘆賞措く與はざる也。

一日法話あり、老姑靜生垂首して聽聞する型の如し。

偶々隣席に一婦人あり、容貌醜ならずと雖、着衣甚だ美ならざる也。老姑偶と之を見るに及んで表情忽ち皺縮し、坐居離反すること遙けく、冷眼此婦人を見る塵芥の如し。

讀經始而終る。全堂の憂婆塞憂婆夷皆等しく默禱新願に及ぶ。

而して老姑も亦祈つて曰く

「大慈大悲の佛さま、この老姑を可愛がり下され」

と、嗤笑に堪えざる也。

よき友達のこと

余に管鮑の友あり、舟橋正雄と謂ふ。交友十年、嘗て爭詐誘の事無し矣。

余年齡二歲渠に長たるの故を以て、渠余に事ふる愛弟の如しと雖、阿諛迫從を構ふる無し。純眞坦々誠に愛す可き也。

然りと雖、余性來嬌慢氣隨、渠の逆意に觸れざる事無しと斷言す可からず、されど嘗て赫顏反抗の氣勢を見ず、思議に堪えず。

一日、余渠に問ふて曰く

「交友十年、余の行爲に逆意憤怒の事義有りや乎」

「無矣」

「余の短所氣附かざる乎」

「有矣」

重ねて問ふ。

「然らば何故に憤怒せざる乎」

渠敢として曰く

「僕、兄と交る十年、その長所に交るにして短所に交らざる也。事々長所に私淑し、嘗て短所介意せず。欲せざれば也」

と、渠年齡余に弟にして、智、兄たり。

與太輕薄のこと

某、余を揶揄して與太輕薄に及ぶ。某余辯せざらん哉。

與太は之れ推斷の理言なり、逸脫の妙言なり。莊子齊物論に曰く「夫子以爲孟浪之言、我以爲妙道之行」と。輕薄は復沈約の所謂「洛陽繁華子長安輕薄兒」などの言と余の與太輕薄と同斷同視は頗る迷惑なり。事義餘悠あれば何んぞ贅言無しとせん。雄辯は銀、沈默は金也の西諺知らざるに非ず。余の職業よく沈默實居せしめん乎。余の與太輕薄は、尠共フレッシュとインノンセンスの加味あるを自信す、余の與太、他人を能辯にし話題釣引の策、余の輕薄復、他を快活親懇ならしむる方便たり。

余の與太輕薄のこと、性來に在らずして職業の然らしむる處也。余を責むる酷に過ぎん哉。余より之を徹去せしめんとせば、宜しく余を社會部記者を退かしめ、他に安置し衣食嗟嘆せしむる無く補育すべし歟。

こは戲語なり、然りと雖、徒らに與太輕薄の訶を受けざるやう余自ら釋明すること凡そ斯の如し。

記事

雪に咲いた奇異の華

加賀釜谷本成寺本堂建つ

諸君は神佛の啓示を感受したことがあるか。諸君は奇蹟を信ずることが出來るか。

監獄の庭に咲いた一輪の白百合が、獰猛奸邪の獄卒たちの心に奥懷しい温い心を育むだといふ話を聞たことがある。之れは自然の生むだ奇蹟である。

こゝに人の生むだ奇蹟がある。

俗に加賀鼎子と云ふ、石川縣釜谷は雪國である。大正十三年一月廿四日この雪の中に佛陀の啓示が確然と現はれた。それは本成寺本堂の建立である。

數萬の寺院の中へ只一箇の寺院が增築されたと云つても、それは少しの問題でも奇異でもない。然し只この一箇寺本成寺本堂のみを隔離してこれを眺むれば、この本堂の如何に奇異で筆者の問題とするに足るかを知ることが出來るであらう。

二年前の雪の朝、この名ばかりの本成寺へ常誓法師が遠く名古屋から留守番に當てられて宿つた。そして二年の時日は經過した。その昔松林であつた地に、今は麗かゝに本堂の甍が雪に反影してゐる常誓法師は道念の厚薄は兎角として、未丁年の故を以つてこの僻地に寓せられたのであつた。だがこの未丁年の常誓法師が本成寺檀徒十六家と協力して、よくこの本堂建立の大事を果し得たことを、その當時誰れが想像しやう。

奇蹟とは即ちこれである。

常誓法師の努力のみでなく、檀徒十六家の信仰力が强固だつたとは云へ、よくこの間に處しこの事業を完成した功德を何人も認めずには置かないだらう。

一月廿四日午前九時より、この奇蹟の殿堂に於て國友僧正導師となつて、加賀越前から集つた僧衆を率ゐて、華々しく且つ莊嚴に大法會は營まれた。餅投げ、稚兒、法話など遠近から集つた信徒を以つて素晴しく盛んに行はれた。

盛んなりし本堂建立の大法會に參加した信徒がこの本堂建立に身命を賭した善智識が未丁年の常誓法師であると知つた時、何人も奇異の感に打たれ、佛陀の啓示に刺戟されたといふ。筆者もこの話を聞き感を同じくし、諸君にその佛陀の啓示を別つた所以である。

活動寫眞を通して

民衆を教化

再建さる、統一閣

本多猊下を統帥として吾等同志は永い間知識階級の思想教化運動に從事し來つて、着々その實蹟を擧げつゝ、現在も亦その運動に努力邁進してゐる處であるが、吾等同志は更にインテルゲンチャのみでなく、一般の民衆をも鋭意教化せしむることとなつた。

從來の一般民衆は低級なる芝居或は活動寫眞を最も趣味の最大なるものとして、之れに興じ、之に和して、その結果を觀ると頗る惡化されてゆく跡を知る事が出來る。

此處に統帥猊下は彼等の最大の娯樂より通して吾等の使命を遂行せんと企圖せられて、今回之れを實行することになつた。

その具体的實行として、昨年九月の大震災に燒失した東京淺草清島町の統一閣を、此の目的の爲に再

建する事になり、陸前釜石に在つた大劇場（收容定員千七百名）を東京に移して、統一閣跡に移築する可く、その落成も二月中に於て完成を見る筈で、場内に設置する椅子なども既に名古屋市に於て盛んに製造されてゐる。

移轉された新統一閣は民衆の爲に活動寫眞常設場として教育映畫を上場し、一般民衆を娯樂の裡に教化せしめる趣向である。

活動寫眞は現代民衆娯樂中最も勢力あるもので、之を利用して吾等同志の使命を果すことは頗る容易で且つ効果あるものと信じてゐる。

自慶會報

△**神戸市**　昨臘十三日午後零時半、三菱内燃機に於て、「國民精神の涵養」△同日五時神戸製鋼所に於て、「國民精神の涵養」△十四日正午、播磨造船所、「大修害と認書」△同日五時三菱造船所、「國民精神と認書に就て」以上本多祝下講演。

△**名古屋地方**　舊臘十五日豊田織機「吾等の先祖」本多祝下「總てを眞摯に」川崎英題師△同日午後五時東洋紡績尾頭工場「國民精神の涵養」本多祝下△十六日山岸製材「吾等の先祖」本多祝下「復興は先づ精神より」川崎英題師△同日豊田織布押切工場「修養の効果」川崎英題師△同日菊井紡織「大地震の話」本多祝下「心主身從」川崎英題師△十七日豊田紡織「人格修養と宗教」本多祝下△同日日本車輛、國民精神作興の詔書（石版刷）を職工全部に授與し終つて講演「國民精神の涵養」本多祝下△十日豊田織機尾頭工場「人間性の發露」國友文學士△同十一日同日第工場「人間性の發露」國友文學士△同日「戰ひより平和へ」國友文學士△大正十三年一月十二日豊田織機尾頭工場　△十四日同日第工場に於て國友文學士講演

各地教信

△**名古屋妙教婦人會新年會**　一月八日午後七時より名古屋市常德寺講堂に於て妙教婦人會新年會を開き國友副正の「一心合掌の力」と題し講演した聽衆した後新年祝賀會に移り餅搗として新愛知お餅團遥登子嬢のお御琵琶彈奏その他三曲合奏等ありて十二分に歡を盡くし同十時閉會した。

△**妙行婦人會例會**　一月十日午後六時より名古屋市妙行寺に於て妙行婦人會一月例會を開き國友日誠副正の「爭鬪より平和へ」と題した講演あり聽衆堂に滿ち頗る盛會であつた。△十七日　刈谷長道寺にて△廿日常德寺横會例會にて國友講師講演。△賀茂郡十七日歩兵第三十三聯隊將校下士の爲に「國民反省の秋」本多祝下講演。

△**千葉常覺寺行事**　千葉縣前之内常覺寺に於て中島元道師講師となつて左の行事を行つた。△十二月一日子供會早起アー　△十九日題目講講演△廿日御會式及震災横死者追悼會△廿一日青年團例會

△**金澤日蓮主義宣傳**　金澤日蓮主義者は十一十二兩月中左の如く實傳及佛事を修行した

△十一月十三日乃木會館國体思想講演　△同日立正會△十七日在家講演△十九日三由氏宅講演△廿二日本長寺例會　△廿六日天晴會講演△廿八日本行寺例會。

△十二月十三日立正會講演　△十六日島村氏宅立正會講演△十七日坂井氏宅講演△十八日本行寺例會△十九日三由氏宅講演　△廿二日本長寺例會△廿六日天晴會例會

△**神戸地方**　舊臘十三日湊東倶樂部に於て日蓮主義講演會を開き本多祝下の「佛教正統の信仰」と題し講演あり聽衆滿堂。

△**羽前通信**　昨冬十一月十二日梨郷本覺寺にて御會式△十三日震災慘死者追悼會△同廿日堀金寶藏寺少年少女會　△同廿二日砂塚藏寺にて慘死者追悼會△一月三日堀金寶藏寺婦人會題目講。

法華經要文講義

本多日生

（本稿は卷尾に附錄として掲載して居りましたが郵便規則に抵觸するそうですから本月號から變更しました）

塵點の劫が擧つて、さうして往いては無限であるといふやうな事が詳しく說いてあつたから、それを指して久遠なること斯の如く、古い前からの正覺である。「但だ方便を以て衆生を敎化して」――方便といふは衆生に適當したる方法に於ていふことで、その適當といふ事も餘程意味が深い、唯だ好い加減に、斯うもして見たら宜からうといふやうな曖昧なものをいふのではない、これはモウ斯うなければならないといふ最も適當な事を「方便」と言つて居る。その衆生敎化の手段方法に於て先づ迦毘羅衛城の王子として出て、さうして捨て難き愛着の絆を切り、あらゆる點に於て優秀なる人格者であることを示し、それから出家成道した佛であるといふ事を說いて來たのである。それは衆生敎化の方便である、八相成道の儀式を示すことは衆生敎化の手段である、佛の內面の正覺からいへば、要するに時機を圖つて天竺に降誕したものである。それから方便を以て衆生を敎化して佛道に入らしめやうとして「是の如き說を作す」――即ち若くして出家して佛に成つたといふ始成正覺、始めて正覺を成じたといふ風に說いたけ

れども、實は久遠實成にして久遠の本佛である、これは前にも同じ事があつた、前には「然るに善男子よ、我れ實に成佛してより已來」といふ事があつた、即ち「然善男子」とあつた、今度は「然我實成佛」となつて居るが、同じ說き方である、壽量品を音訓にする時は、そこが能く間違ひ易くなるのである、あの「然善男子」といふのと「然我實成佛」といふ所は同一の事を說くので、その同一は過去登物の場合、現在登物の場合と、先づその久遠常住の如來といふことを起點として、それからその活動を說かなければならぬから、これが正しく顯本の文である、本佛といふことを顯す文であります。

一二一、諸の善男子よ、如來の演ぶる所の經典は皆衆生を度脫せんが爲なり或は己身を說き、或は佗身を說き、或は己身を示し、或は佗身を示し、或は佗事を示し、或は佗事を說く所は皆實にして虛しからず。

それから以來どういふ活動を續けたかといふに就て、今度現在出て來ての活動に就ても、即ち如來の演ぶる所の經典は、皆衆生を度せんが爲で、一切經は衆生濟度の目的に依つて說かれたものであるから、その中には無論方便も起つて來る、濟度の方法を考へる時、いきなり最高完全なる敎を與へることは難かしいものであるから、そこで「或は己身を說き、或は佗身を說き」——己身といふは、佛に關しての說明、佗身といふは菩薩以下九界に就ての說明でありますが、それがいろ〳〵になつて、樓々な說明が起つて來る、或は名前も違つたり事柄も違つたやうになつて居るからして、或は阿彌陀といふ

名に於て說いたり、地藏菩薩といふことで說いたりするやうなものである、その他動物に成つて居るやうな事もあるであらうし、澤山の說話が其處に出て來るのであるから、それが己身を說き佗身を說くといふ事である。又、或は「己身を示し、或は佗身を示し」で、唯だ口で言ふばかりではない、神通の力を以ては、現にさういふ違つた佛が現れたかの如く、又違つた菩薩以下の者がそこに身を現じ作用を示しても、此處に釋迦が法を說いて居つて、他に違つた佛が出て來たといつても、その出て來た佛もやはり自分である、本佛が示現するのであるから、澤山に身を現はしても、それは他の者が來た譯ではない、この本佛が衆生變化の必要上に於て種々に身を示現した譯である。又さういふ人格者として現れるばかりでなく、事柄として、佛樓の事柄、或は菩薩以下の事柄に關してもいろ〳〵な事を示して居る、即ち「或は已事を示し、或は佗事を示す」といふのはそれである。要するに一切經に於て說かれて居る事、又その中に現はれて居る事——說くといつても說く中にやはり現れた事が說いてあるのであるから、話すばかりではない「斯ういふ事があつた」といふ話は、例へば地震なら地震があつたといふ話は、即ち地震のいつた事柄があるのである、けれどもお經となつてしまへば、人が顏を出した事でも何でも唯だ誰が顏を出したと書いてあるから、それは皆說話のやうに見えるけれども、それ等は要するに口を以て說く事と、身を以て現はす事の二つで、之を形と聲との二つの活動といふのであります。その中に一切納まつてしまふ、どの位澤山お經があつていろ〳〵の事が說いてあつても、說いた事は皆釋迦の口

より出でたる說話であるし、又いろ／＼の事を其處に現しても、これは釋迦の神變の力を以て現したものので、一切の說明および事柄は釋迦の說法と釋迦の活動に外ならぬものであるといふ事を現すのである、佛敎の內部に於けるあらゆる事柄は、皆衆生を濟度せんが爲にこの本佛の爲したる活動に外ならぬ。それ故に表面から見て怪誕不稽に見える事でもそれは皆衆生濟度の爲になさつた事であるから、結局は眞實に歸してその事が虛しからぬものである。例へば子供を躾けるに、假に子供が泣いて仕方が無い、それを泣き止ます爲に「さう泣いて居ると鬼が來て伴れて行きますよ」といふやうな事を能く言ふ、それは鬼を說くのではなくして、その子供の泣きを止めるといふ目的からいへば、それに依つてやはりその効果を奏して居るのであるから、目的が鬼にあるのではない、子供の泣きを止めるに在るといふ事から考へたならば、一切經の方便應用も皆眞實なる効果を奏したといふことが言へるのであります。

一二二、所以は何ん、如來は如實に三界の相を知見す、生死の若は退若は出有ること無く、亦在世及び滅度の者無し、實に非ず虛に非ず如に非ず異に非ず、三界の三界を見るが如くならず、斯の如きの事、如來明かに見て錯謬有ること無し。

この所は、何故にこの釋迦本佛が一切經の說明および活動神變に於て少しも過誤を取らないか、總べて說く所は悉く濟度の目的を果たし、總ての活動は皆その効果を奏したといふ事は何故であるか、それは唯だ起る事ではない、この本佛は絕對の智慧を有つて居り、廣大なる慈悲があつて、その慈悲から出て衆生を救濟しやうといふ親切の極點と、それを過たないだけの智慧の完全といふものがあつて、その作用が現れて居るのである、所謂全智全能より現れて來る所以を說明したのが、この「所以は何ん」といふ言葉である。何故に衆生濟度に於て過誤を取らないかといへば、「如來は如實に三界の相を知見す」——眞理といふものを佛の——上といふと宜くないが、先づ之を右とするならば、右には眞理を照らし、左には衆生を見て居るのである、見方が二面になる譯である、一方には眞理を照し見る事と、一方には人を救ふに就てその人の性質機根を見なければならぬ、眞理は能く見て居つても、機根を見ることが足らなければ應用を謬る譯である。例へば醫者にして見れば、病理の研究が積んで居つても、實際の病人に對する診斷を誤れば駄目になる譯である、だから病理の方に於ても完全なる智慧を有ち、診斷の場合の觀察力に於ても完全なる智慧を有つて居るといふのが本當の名醫である。そこで先づ如來は如實に三界の相を知見する、「如實」といふのは實の儘で、普通にいへば眞實といつても宜いのである。「三界」といふのは印度の傳說から起つた事で、慾界、色界、無色界といつて居るが、要するにこの宇宙の全體である、即ち天地宇宙の眞實の相を照し見ることに於て錯謬が無い、眞實にそれを見て居るといふのである。それから啻にさういふ冷やかな、宇宙に對する哲學的眞理に於て實相を見て居るばかりではない、生きとし生ける所の、或は生じ或は死する所の人格

を持つ者、それが退いてこの世の中から何處に行つたか判らぬとか、或はこの世の中に不意に出て來たとかいふ事を言ふのであるが、それはさういふ部分を見るからして、生れる時に出て來た、死んで何處に行つたか判らぬといふやうなことになるけれどもその人々の生命の全體を觀透して居れば、生死といふものは無い、又退出といふものは無い。恰も月なら月を全體から見て居れば出沒は無いけれども、山の下に居つて月を見て居れば山の上から月が出た、海に眼を遣らるれば海に月が沒した、斯う思ふけれども、これはその出沒は人間の眼が及ばないだけのものであつて、月と同じに附いて行つてそれを見たならば、日月には出沒といふものは無い。恰度そのやうに吾々の生命の全體そのものと共に一緒にそれを見たならば、生死とか退出といふものは決して有るものではない、常住不滅なるものである、何時魂が出來て何時魂が亡くなるといふやうな、左樣な始め終りのあるべきものではない、何ともいへない微妙なる本體を有つて居るものが、業の力に依つて動いて居るに外ならぬのである。隨つて「亦在世及び滅度の者無し」で、この世の中に存在して居るとか、亦滅度して亡くなつたとかいふことは無い、自分の狹い感覺の知識から見るが故にさういふ事が出て來るのである。それ故に正しくこの人生を見るならば「實に非ず虛に非ず」で普通の人が考へて居るやうな實在といふことではない、普通の人のいふ實在といふのは、唯だ斯うして人間として生きて居るといふやうな事だけを實として居る、これが死ねば虛無に歸したと考へて居るが、さういふ感覺的知識に於て認めた實在とか虛無とかいふ事とは違ふ、存在を見れば眞實の本体に於ての不滅を見なければならない、それであるから普通の人は肉眼で見てこれは確實だといふけれども、それは感覺の上からいふので、少しも確實な存在とは言へないのである。又「如に非ず異に非ず」――これも「如」といふは平等でありますが「一味」と譯してある、凡俗は平等といへば何もかも唯だ同じいと考へるけれども、さういふものでもない、又「異」といつて差別の方のみに思ふけれども、さうでもない、凡俗は平等の一面を見たり、差別の一面を見たりするけれども、この萬有は如何にも玄妙なるものであつて、平等にして差別、差別にして平等といふ、如何にもその關係が微妙なるものである。現代の文明でも、モウ少し人世の微妙なる所を味はなければならぬ、差別をいへば差別に趨り、平等をいへば平等に趨るといふ三角頭の思想ではこの人生といふものは解釋がつかぬ、それは大体魂を有つて居るものを解釋する方式に外れたものである。一切の人々の間に於て、又迷へる者と覺れる者の間に於て、その關係といふものは、平等と差別と、その兩面を同時に見なければならぬものである、それが所謂「諦觀」といふことになるので、諦かに觀なければならぬ。

それ故に三界の迷へる人が三界を見て居るのと、如來の見方は違つて居る、三界の人は誤つた見方をして居るが、如來は正しく見て居る。「斯の如きの事」――一つは宇宙の全体、一つは其處に生れたり死んだりして行く者の上に於て、「如來明かに見て錯謬有ること無し」――その兩方とも、人々の魂を見る上に就いても、宇宙の眞實を見る上に就いても、少しも間違つた所はない、能くその眞相を看破つて居る所

のものである。そのやうな智慧を有つて、さうしてそれに無限の慈悲があつて應用を試みて行くが故に一代の化導悉くその効果を奏した譯である。要するに大智慧と大慈悲との中から割出した方便應用であるから、其處に間違ひが無いのである。

一一三、諸の衆生、種々の性、種々の欲、種々の行、種々の憶想分別有るを以ての故に。

そこで前にいふ衆生の機根を見る醫者の診斷の方に間違ひがあつてはならぬから、「諸の衆生、種々の性、種々の欲」といふやうな違ひがある、大勢の人々の心の本質は同じものであつても、そこに先天の性が違つて來て居る、非常に理智の長じて居る人もあるし、感情に傾いて居る人もあるし、それは千差萬別である、隨つてその欲望も違つて居るし、又その欲望に導かれた行爲も違つて來るものである、さうしてその違り損ひをした事に引つかゝつて煩悶をしたり、少しく成功をしたといつて調子に乘つて跳ね廻つたりして、樣々なる憶想といふものが浮いて居る、それ故にそれを一々見なければならない。それを悉く見て、さうしてそれに適當したる所の敎を立てたから、佛敎が樣々なる形に依つて現れて來たのであるけれども、要するに釋迦一人の眞理に徹した智慧と、機根を見る智慧と、その間に流れて居る慈悲と、それから出たものが佛敎である。阿彌陀經も大日經もあつたものではない、釋迦の大化導の一波動を阿彌陀經だの大日經だのと言つて居るのである、釋迦を忘れては一切佛敎の根本は無いものである。

（續く）

目次

國民精神涵養の詔書を拜して……本多日生
うゐの奥山今日こえて……本多日生
我等如何に進むべきか……森川日修
記事報導……

第廿八年三月號

講習會開催廣告
顯本法華宗專門

一時日　大正十三年四月三日ヨリ
　　仝九日マデ每夜間
一會場　大阪市板屋橋北詰大紙倶
　　樂部
一講師　顯本法華宗管長大僧正本
　　多日生師、仝宗務總監僧
　　正井村日咸師
一會費　聽講料金貳圓
一事務所　大阪市西高津中寺町蓮成
　　寺內
一申込期限　大正十三年三月十五日マ
　　デニ事務所宛照合セラレ
　　タシ
主催者　立正結社大阪支部

謹賀新年

金澤市鈴坂本長寺
窪田純榮

統一定價

一冊	金貳拾錢	送料五厘
半ヶ年	金壹圓貳拾錢	送料共
一ヶ年	金貳圓貳拾錢	送料共

廣告料

一頁	金拾圓	前金の事
半頁	金六圓	
四分ノ一頁	金參圓半	

大正十三年一月十七日印刷納本
大正十三年二月一日發行（第三百四十七號）

東京府荏原郡品川町南品川四百十二番地
編輯兼發行人　國友日斌
印刷人　鈴木日雄

名古屋市東區千種町字五反田廿五番地
印刷所　三益社

東京府荏原郡品川町南品川四百十二番地
發行所　統一發行所
振替東京五一〇七一番

名古屋市東區田代町字城山七十七番地
編輯局　統一編輯局
電話名古屋東五四八七番

不許複製